

本学の FD 活動の現状と今後の展望



組織的な FD 活動の重要性と支援体制

FD 委員会委員長 学長 山下興亜

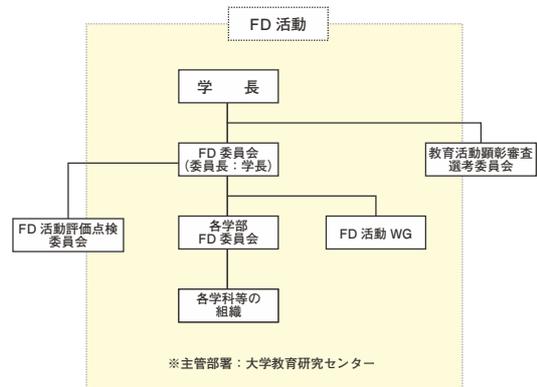
中部大学は、より良い教育活動・改善を目指した種々の FD 活動を全学 FD 委員会のもと、全学 FD 活動ワーキンググループ (WG)、各学部 FD 委員会および各学科の FD 組織などが連携しつつ検討し、組織的に実施している。

また、優秀な教育活動を顕彰するための教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動の評価点検体制も整えるために、FD 活動評価点検委員会も組織している。

2008年度には、FD 活動の重点目標として「魅力ある授業づくり」を掲げて、2009年度には「授業サロン」「全学公開授業」「教員キャリアアッププログラム」を試行するなど新たな FD 活動にも積極的に取り組み、「FD 活動評価点検報告書」をはじめとしてそれらの活動をホームページ上で公開することで大学としての姿勢を学内外に発信している。

また、学科・教室等の FD 活動を支援するために、活

動経費の補助を受けやすく工夫したこともあり、引き続きすべての教員、すべての学生と一緒に、中身の濃い、実りある FD 活動を組織的に推進し、実施していきたいと考えている。



中部大学の FD 活動組織図



新たな FD 活動へのチャレンジ

大学教育研究センター長・学監 教授 坪井和男

本学の FD 活動を見つめる

中部大学では、FD 活動を企画、検証していく上で「FD 活動評価点検報告書」を作成することとした。まず、文理多様な性格をもつ30以上の学科、教室等各組織の活動を FD 活動評価点検委員会で種々の観点から検討し、本学に適した FD 活動の分類を模索した。他大学では、個人の授業改善に当たる「マイクロレベル」、カリキュラム改善の「ミドルレベル」、さらには組織の整備・改革の「マクロレベル」と大きく3分類している例もあるが、本学ではミドル・マクロレベルの諸活動が FD 委員会の所掌事項でないため評価対象外とし、主に「ミ

クロレベル」の授業改善に直接結びつく活動をさらに分類すべく検討し、次の表のとおり全学 FD 委員会で承認された。

これらの分類は、中部大学の各組織における FD 活動の指標となり、また、本学の「FD」が教員意識の中で収斂していくためにも有用と考えている。

3つの観点で分類した中部大学の FD 活動 (グレー枠は除外した項目を表す)

目的別	対象別	形式別
① 授業・教授法の改善	① 全学対象	① 会議・打ち合わせ
② 教員の資質向上 (研究交流を含む)	② 学部対象	② 懇談会
③ FD 活動の企画・運営など	③ 学科・教室対象	③ 講演・報告会・セミナー
カリキュラム改善	(*) 非常勤を含む	④ ワークショップ
組織の整備・改革	(*) 学生を含む	⑤ 制度・システムなど (*)2
	授業担当者	

(*)1: 対象別①～③で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*)2: 例えば、授業評価システムや FD 関連制度の運用、FD 関連システムの構築および出版などが該当

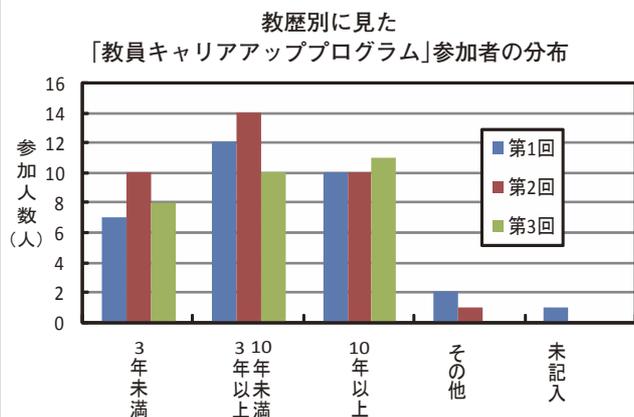
新たなFD活動の試みと自主的活動の大切さ

ここでは、2009年度からの新たな取り組みについて紹介する。

まず、各組織に対するFD活動支援費の使途を拡大し、学外でのFD研究会、FD研修会などへの教員の参加等にも活用できるようにした。この支援制度の拡充により2008年度実績の倍以上の組織で活用され、学内で新たなFD活動が展開され、より多くの教員がFD活動に参加していく土壌が生まれているといえよう。

新たな試みとしては、FD活動WGの教員と自主参加された学部・学科を越えた異分野の教員がそれぞれ5人で2つのグループを構成し、それぞれのグループ内で相互の授業見学を行う授業研究会タイプの「**授業サロン**」を実施した。すべての授業見学終了後には、グループの教員からの意見と自分の授業DVDを見ての“振り返り”を基に意見交換会を行った。「授業サロン」に参加した先生方の感想は「最初は“自分の授業を見せる”ことに抵抗や“やらされ感”はあったが、いざ体験してみると、自分の授業の取り組みや特徴に改めて気付かされた」「他人の授業を見て、自分でも工夫・改善できる点があることに気付いた」「授業を公開することは緊張するが、自分自身でも新鮮でピリッとした感じで授業を行うことができた」「自分の授業風景を振り返ることで、徐々に自分の授業を商品として冷静に見られるようになった」など『魅力ある授業』へ向けての多くのヒントが得られたと好評価であった。このように異分野の教員が小グループでお互いに忌憚なく授業改善を研究し合うことは大きな意味があり、FD活動の目指す教員間のネットワークにも繋がるものと確信するに至った。

もう1つの試みとして、本学で必要と考えられる教員のスキルや知識に関する「**教員キャリアアッププログラム**」を3回実施した。これまでのFD講演会などとは形式を異にして、実習・ワークが可能な30人程度に人数を絞り、より実践的な内容のプログラムを企画した。各プログラムとも教育分野、職階や教歴年数に関係なく多様な先生方に参加していただいた。



第1回は話し方に関するテーマで、本学の小林礼人准教授（理学教室）の授業の基本的な進め方を確認するための事例紹介に加えて、東海ラジオ元アナウンサーの松原敬生氏からは、「話す術の裏には“伝える”気持ちが必要である」ことなどが指摘された。第2回、第3回では、愛媛大学教授の小林直人氏を講師に招き、2つのプログラム「大人数講義法」と「グループワーク（GW）の進め方」を実施した。プログラムでは「私語を叱る前に私語の発生を回避しなければならない」などと私語対策のヒントをいただき、また、「文殊カードなどのアイデアが参考になった」「GWでのアイスブレイク（緊張をほぐすこと）や時間管理の重要性を実践的に楽しく学べた」など、すべての参加者から大変好評であった。「教員キャリアアッププログラム」は、その内容から受講者定員を決めて実施したため今回参加できなかった先生や会議などのために参加したくてもできなかった先生方から、同様のプログラムを繰り返し実施してほしいとの要望を受けたことは、新たなFD活動への試行が評価されたものであり、今後も同様のプログラム、楽しく学べる機会を大いに提供していきたいと考えている。



第3回教員キャリアアッププログラム

最後にこれらの新たなプログラムの企画、実施に際しては、各学部のFD委員以外に全学からの公募等により自主参加の先生にも加わっていただき、心強い味方を得て試みが実施できたことにあらためて感謝するとともに、今後のFD活動により多くの先生方の積極的な参加、ご協力を切に期待したい。

FD活動によって早急に明らかな成果を求めることは難しいと考えられるが、すべての教員のFDに対する意識の収斂と行動こそがこれからの本学FD活動が目指していくものと確信し、大学教育研究センターとしてはこれらの諸活動を全面的に支援したいと考えている。